

(別紙 2)

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 青木 淳子

本研究は、近代皇族による西洋文化の受容と消費を、皇族妃のファッションを事例に、儀礼やモダニズムという側面から読み解くというもので、「服飾」という視点から日本近代社会史の一面を分析したものである。

序論では、本研究の目的と分析視角、先行研究、分析する史料などを解説している。

### 第一章「皇族の洋行と装い」

第一節「皇族の洋行―留学と外交」では、外務省外交史料館に所蔵されている公文書を用い、近代皇族の渡航を概観している。皇族の渡航は、明治3年華頂宮博経親王が最初で、初期は軍人となった皇族の軍事留学が中心だが、次第に親善のための巡遊も行われるようになった。皇族の渡航は、語学力を磨き洗練されたマナーと外交儀礼を身につける機会となり、また天皇の名代として皇族外交を行うことにもなった。第二節「軍服とドレス」では、明治41年より民間の雑誌社から出版される『皇族画報』を分析している。『皇族画報』の書誌学情報を踏まえ、この雑誌に掲載された天皇・皇后、皇族・皇族妃の衣装を丹念に分析し、皇后の装いは国家の威信をかけたもので、宮廷の近代化の象徴だったことを指摘する。また、当初男子皇族は軍服姿だったが、次第に背広姿やゴルフの衣服などで登場し、皇族妃もアール・ヌーヴォー様式のドレスを身にまとい、ファッション・リーダー的存在になったことを明らかにする。

### 第二章「皇室外交と装い―プロトコル（国際儀礼）の摂取」

第一節「梨本宮と伊都子妃の洋行」では、外務省史料「梨本宮殿下欧州各地御巡遊一件」や梨本宮伊都子妃の日記を中心的な史料として用い、明治42年の梨本宮夫妻の渡欧を分析し、謁見・叙勲・親電・公式行事・贈答などの外交儀礼について分析を加えている。第二節「伊都子妃が摂取した西欧文化」は、伊都子妃が登場する新聞・雑誌記事を分析し、掲載された写真をもとにさまざまな場面で着用される衣装に詳細な分析を加えている。第三節「儀式における装束とドレス」では、梨本宮守正王と伊都子妃の婚礼・朝見・即位の礼などの儀式に着用された装束を分析し、宮中での伝統的な装いは和装の「装束」だったが、他は洋装が採用され、私的な場面では着物が用いられたことを指摘している。第四節「公と私―和と洋の重層的構造」では、『婦人画報』などに掲載された写真などをもとに、伊都子妃が和服で銀座のデパートに買い物に行っていることを示し、ヨーロッパで買い物の楽しさに目覚めた経験によるものだが、一面で街の様子を見に行く行動でもあったとする。

### 第三章「皇族モダニズム―消費社会における生活文化の摂取」

第一節「朝香宮鳩彦王と允子妃のパリ滞在」では、朝香宮鳩彦夫妻のパリ滞在中の消費生活を、東京都庭園美術館に残されている三千枚に及ぶ受領書綴りの丹念な分析によって明らかにしている。その際、領収書の分析に留まらず、当時の勤労家庭や軍人家庭の家計簿と対照することで、

皇族妃の消費がいかに莫大なものであったかを示している。また、パリ調査によって允子妃らが訪れた洋品店やレストランなどの現在の姿を写真で紹介している。第二節「1920年代におけるパリの日本人社会」では、経済人であるアルベール・カーン宅に残る肖像写真から、朝香宮夫妻を取り巻くパリの日本人社会の交遊の一面を明らかにしている。第三節「允子妃のアール・デコファッションと肖像写真」では、先の受領書綴りから、服飾関係の消費を抜き出し、ファッションや装身具の細工や値段について詳細に分析している。第四節「都市空間における朝香宮」では、通称アール・デコ展と呼ばれる博覧会を見た朝香宮夫妻が、アール・デコ様式の建物として名高い朝香宮邸（東京都庭園美術館）を建設するに至った経緯を読み解いている。

#### 第四章「皇族妃の渡欧とファッションの意味」

この章は、全体の理論的まとめで、「近代天皇制における政治とファッション」「モダニズムとファッション」「文化の視点でみる洋装化と皇族妃のファッション」「近代皇族妃の洋行によるファッションの意味」の四節からなる。近代日本において上流階級女性の洋装は日本の近代化にとって不可欠な政治的な側面が強く、梨本宮伊都子妃の洋装も「外交儀礼」としてとらえることができる。それに対して朝香宮允子妃の洋装は、渡欧による自由な生活の中で獲得された消費の側面が強い。しかし、そうであっても皇族妃の洋装は、雑誌に頻繁に掲載されるなどメディアとしての役割を持ち、大衆モダニズムに先行する役割を果たした、とする。

終章では、論文全体をコンパクトにまとめ、本論文の意義として、近代皇族の私生活史を明らかにしたこと、皇族モダニズムという概念を明らかにしたこと、の二点を強調している。

本論文は、近代皇族妃の装いが、明治期にあってはきわめて政治的な意味を持つものであり、大正期には、政治的な役割よりは流行の最先端のメディアとしての効果を持ち、洋装についてのイメージを高めたことを、多彩で豊富な史料によって説得的に示したものである。これは、近代皇族の私生活史を明らかにし、歴史学の分野でほとんど見落とされていた服飾という独創的な視角から近代社会史を補完した研究として、大きな意義がある。

また、歴史情報研究という側面で見れば、断片的な受領書綴り、あるいは肖像写真などを、公文書や雑誌など周辺史料と関連して分析することによって、これまで注目されなかった歴史の一面に光を当てており、卓越した分析技術や明らかにした史実の豊富さは、博士論文にふさわしい水準にある。

皇族モダニズムと大衆モダニズムとの連関についての実証的分析、皇族の装いがメディアとして果たした役割の評価などの点ではいまだ課題も残るといふ指摘もあったが、歴史学、歴史情報学の実証的な研究論文として、本審査委員会は全員一致して高い評価を与えた。以上の理由により、本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断する。